

日本語の繰り返し表現について

——繰り返し表現の類型化と意味の派生のメカニズムを考える——

牧原功（群馬大学）

要 旨

これまで、日本語のトートロジー表現（以後は繰り返し表現と述べる）についていくつかの研究が行われているが、なぜ同一語句を繰り返すことで様々な意味の伝達が行われるのかについて、正面から取り組んだものは見受けられない。本稿では、日本語の繰り返し表現がなぜ様々な意味を表しうるのかについて、意味論的、語用論的な立場から考察した。本稿では、繰り返し表現を意味構造からコピュラ型と条件型に分類し、それぞれで意味の派生のメカニズムが異なることを主張した。

キーワード: トートロジー、繰り返し表現、コピュラ、内包的意味

1. 日本語の繰り返し表現について

1.1. 日本語の繰り返し表現

日本語に限らず言語にはトートロジーと呼ばれる同一語句の繰り返し表現がある。

(1) トートロジーって何？

トートロジーはトートロジーだよ。

(2) 2Lでも前後左右が長くても1t超えてもロードスターはロードスターだった。

(3) 人と比べても意味はないよ。君は君だ。

(4) 料理ができるってインスタントラーメン？

インスタントラーメンだって料理は料理です。

これらの文では、「トートロジーはトートロジーだ」「ロードスターはロードスターだった」「君は君だ」「料理は料理です」のように同一語句を繰り返して用いている。また次のような文もやはり同一語句の繰り返し表現である。

(5) 漫画も本といえば本だ。

(1) から (4) は「A は A だ」という構造であるが、(5) は「A といえば A だ」という構造を持っている。これまで日本語でトートロジーと呼ばれる修辞法について厳密な定義はされてこなかったが、一般的には (1) から (4) のようなタイプを扱うことが多かったように思われる。だが実際には (5) のような形式の文もあり、本稿では今後、これらの表現方法、修辞法を総称して繰り返し表現と呼ぶこととする。(1) ～ (4) のタイプと (5) のタイプには共通する性質も、異なる性質も見られるが、その差異については後で考察することとしたい。

1.2. 先行研究と本稿で扱う問題

日本語の繰り返し表現については、これまでいくつかの言及がなされている。例えば瀬戸（2003）では「あえて同じ表現を繰り返すことによって、無意味に陥ることなく、かえ

って意味の同一性を積極的に主張し確認する表現法」であると述べ、酒井（2012）では、「語の使用と語の意味は一蓮托生である。使用されるということがすなわち意味をもつということであり、意味をもつのはすなわち使用されるということなのである。「語が意味をもっているおかげで、その語を使うことができる」という発想とは手を切らなければならない。」と述べている。

また、筆者も 2016 年の ICJLE バリにおいて「日本語の繰り返し発話は、命題レベルでは情報量はゼロであるが、相手との認識のずれを主張したり、相手の依頼や提案を客観的な事実の提示によって断ったりするという、語用論的機能を有する」小野、山岡、牧原、李（2016）と主張している。

これらに共通する主張は、繰り返し表現は「同じ語句を繰り返して使用することで意味的には無意味になっている」という点であり、その無意味さが、豊かな表現方法となったり、意味を持たない語を用いても意味は表せたり、語用論的な機能を生むというものである。

しかし、本当に繰り返し表現は命題レベルでは情報量はゼロなのであろうか。本稿ではまずこの点に立ち戻り、検討を試みたい。

1.3. 日本語の繰り返し表現と定型化

日本語の繰り返し表現には、上で見たように「A は A だ」というタイプと「A といえ A だ」というタイプとがある。これらのうち前者をコピュラ型と呼び、後者を条件形型と呼ぶことにする。

それらの意味的な考察を進める前に、繰り返し表現の中には、純粋に文法的な意味を表していると考えられるものと、いわゆる修辞法としての繰り返し表現として用いられているものがあることを確認しておく。

(6) 田中さんが行くと言えば行くけれど、あまり気乗りはしない。

(7) バリに行くと言えば行くけれど、仕事だから観光はできそうにない。

(6) の例は「田中さんが行くと言え」ば」「私も行く」であり通常の条件表現の「～ば」の用法の範疇であるが、(7) は (6) のような通常の条件表現の意味では解釈できない。

以後は (7) のようなものを、定型化した繰り返し表現とし、考察の対象とする。

1.4. 繰り返し発話の命題レベルの意味について

まず、命題レベルで繰り返し発話が表す意味について考えておきたい。

既に取り上げた例文であるが、以下の 2 つのコピュラ型の繰り返し発話は、異なる命題レベルの意味を有しているというのが本稿の立場である。

(1) トートロジーって何？

トートロジーはトートロジーだよ。

(2) 2L でも前後左右が長くても 1t 超えても ロードスターはロードスターだった。

(1) の例における、最初の「トートロジー1」と次に繰り返して使用される「トートロジー2」は全く同じ概念的意味を有していると思われる。では、(2) の「ロードスター」はどうだろうか。

最初に用いられている「ロードスター」を「ロードスター1」、繰り返されるものを「ロードスター2」、とすると、それらは実は同じものを指示しているわけではない可能性がある。

ロードスター1:現在の大型化されたロードスター

ロードスター2:最初のモデルのロードスター

つまり、「ロードスターはロードスターだった」は、「現在の大型化されたロードスター」も「かつての最初のモデルのロードスター」の持つ性質をそのまま受け継いでいた、ということ述べていると解釈できる。

このような分析が正当なものであるとすれば、(2)のような文は形式的には同一語句の繰り返しであるが、表す情報構造から見れば同一構造のは繰り返しではないということになる。例文(3)についても

(3) 人と比べても意味はないよ。君は君だ。

君1:表面に現れている君

君2:本質的な君の性質を有する君

と考えることは可能であろう。

だとすれば、繰り返し表現のある種のもの、実は命題レベルでも意味情報を持っていると考えられる。そして、命題レベルで表す情報の違いによって、意味の差・用法差が生じていると仮定できる。

以下では、このような仮定に立ち、繰り返し表現の代表的な形態を取り上げ、それぞれの表す機能を記述し、その用法差がなぜ生じているのかを、繰り返し表現の命題レベルでの情報の差という視点から説明することを試みる。

2. 繰り返し表現のバリエーションと機能

既に述べたように、繰り返し表現にはコピュラ型と条件形型とがある。まず、それぞれの文例を取り上げ、そのような用例が観察されるのかを見ていくことにする。

2.1. コピュラ型

コピュラ型には、名詞を用いた「AはAだ」というタイプと、動詞を用いた「AことはA」、形容詞を用いた「AことはA」の3つのタイプがある。

2.1.1. 「AはAだ」のタイプ

名詞を用いた例を Google の検索オプションで調べてみると、例えば以下のような例を探することができる（繰り返し表現に該当する部分の下線は筆者の加筆である）。

(8) 電子書籍でも、「本は本」だと思いますが、紙媒体の良さも忘れないでほしいですね。

(9) いくら貴重な本でも、本は本だ。

(10) ウサイン・ボルト選手はスポーツ仲裁裁判所の裁定について「悲しいが、規則は規則だ。決定を尊重しないといけない。自分に決断の権利はない」と述べた。

これらの例を分析するにあたり、コピュラ文の分析でこれまでよく用いられてきた概念を確認しておく。

コピュラ文の体系的な分類を行った西山（2003）によれば「AはBだ」というコピュラ文は、措定文、倒置指定文、倒置同定文、倒置同一性文、定義文の5種類に分けることができるという。それぞれを簡潔に整理すると、以下のような特徴を持つ。

コピュラ文の整理 西山（2003）による

意味構造	例文
措定文	あいつは馬鹿だ
倒置指定文	幹事は田中だ
倒置同定文	こいつは山田村長の次男だ
倒置同一性文	ジギル博士はハイド氏だ
定義文	眼科医は目のお医者さんのことだ

西山は名詞述語文の分類の基準として名詞句の指示性という概念を重視しており、それに従うと、措定文、倒置指定文、倒置同定文はそれぞれ次のような名詞句の指示性を持つ。

- 措定文 【指示的名詞句】は【叙述名詞句（非指示的）】だ。
- 倒置指定文 【変項名詞句（非指示的）】は【指示的名詞句】だ。
- 倒置同定文 【指示的名詞句】は【指示的名詞句】だ。
- 倒置同一性文 【指示的名詞句】は【指示的名詞句】だ。
- 定義文 【指示的名詞句】は【指示的名詞句】だ。

これらのうち、繰り返し表現のコピュラ文が該当すると思われる、措定文と倒置同一性文についてももう少し説明を加えると、それらは以下のようなものである。⁽¹⁾

措定文 :AはBだ。AはBの性質を持つという意味をあらわす
 「あいつは馬鹿だ」とは言えるが、「*馬鹿があいつだ」とは言えない。

倒置同一性文:AはBだ A=B
 「ジギル博士はハイドだ」「ハイドがジギル博士だ」

ここで、これまでに挙げた、「AはAだ」の形の例文について、どのような文構造に該当するのかを検討していきたい。

まず、例文（2）（3）のタイプは、「聞き手にある物事が持つ属性を喚起させて、対象物もその属性を有することを理解させる。」という意味構造を持つと思われる。最初の名詞句A1は指示的名詞句であり、述語の名詞句A2はその意味を示す叙述名詞句となっているということである。つまり、これらは措定文であると考えられる。

それに対して、（1）のようなタイプの文、「トートロジーって何?」「トートロジーはトートロジーだよ」では、二つの「トートロジー」という語を「Aは」に該当する部分をトートロジー1、「Aだ」に該当する部分をトートロジー2とすると、それぞれの名詞句の表す意味は全く同一であり、A=Aという意味しか表していない。つまり、指示的名詞句=指示的名詞句となり、それぞれの名詞句は同一性のものであるため、このようなタイプは倒置同一性文として成立しているというわけである。

ここで問題となるのは、措定文としての「AはAだ」の意味の解釈は比較的容易であるが、倒置同一性文の意味の解釈がどのように行われるかということである。倒置同一性文の場合、どちらの名詞も全く同じものとしてしか用いられておらず、概念的な意味を表さないこととなる。その場合、文の意味解釈としては二つの方向性を持つのだと本稿では考えたい。

一つは、聞き手に全く新しい情報を提供しないという意思表示を行ったという解釈であ

る。この場合は、「説明放棄」という意味が派生する。「わかららないってどういうことですか?」「わかららないってというのはわかららないってことです。」のような例もこのタイプと言える。

もう一つは、概念的な意味を有さないが故に、内包的な意味をそこから派生させるというものである。言うまでもないことであろうが、概念的意味とはある語が表す実質的な意味を指し、内包的意味とはある語に対して言語使用者が共通の認識として持っている「犬」から連想的される意味を指す。例えば「犬」と言った場合、それが食肉目イヌ科の哺乳類であるという意味は概念的意味であり、「忠実」「賢い」「スパイ」といった意味は内包的な意味となる。次の例を見られたい。

(11) うちのかみさんは猫みたいなところがあってね。

猫ってどんなですか?

猫は猫だよ。気まぐれでわがままだけど憎めないんだ。

この場合、「猫は猫だ」と言って説明を放棄しているわけではない。また、猫1が猫2の特徴を持っているということを表しているわけでもない。猫という語の持つ内包的意味としての「気まぐれ」「わがまま」「かわいい」というものを、繰り返し表現をとることによって浮き上がらせていると考えられる。また、例えばロシア語では「人生は人生だ」という表現があるそうであるが、これは、人生はつらく苦しいものであるという文化や社会の共通の概念を述べることになるという。これも、繰り返し表現を用いることで語の持つ内包的な意味を強調するという働きがあると考えられる。

2.1.2. 「A ことは A」のタイプ (動詞)

これは正確には「A ことは A だ」という形を取らない場合もあるため、コンピュータ文ではないものも含んでいる。しかし便宜上ここで整理しておくことにしたい。動詞を用いた「A ことは A」の文には以下のようなものがある。

(12) 私も食べることをやめるなんて絶対にできなかったので、食べることは食べるけれどその量を減らすところから始めました。

(13) 正確に言うと、餌を食べることは食べるのですが、『自分から』食べようとはしないのです。

(14) 一人暮らしを始めてかれこれ10年ぐらいたつのですが、最初は料理の”り”の字も出来ませんでした(笑) スーパーに行くことは行くもののどれを購入していいかわからない。

(15) 蕎麦屋にも行くことは行くけど、何となく敷居の高さを感じて、自然に足が遠くなっていたような気がします。

(16) タコは江戸っ子も食べたことは食べたのですが、安価なものではありませんでした。

これらはみな、「A ことは A」という形の後に「けれど」「のですが」「ものの」などが接続している。このようなタイプの表現は措定文的な用法しかないようである。⁽²⁾ また、頻度を用いる場合に多く用いられる傾向がみられる。

純粋なコンピュータ文は、「A ことは A ことだ」という形しかなく、「生きることは生きることだ」のような用いられ方をする。その場合の意味はやはり、説明放棄か内包的意味の強

調のいずれかであると考えられる。

2.1.3. 「A ことは A」のタイプ（形容詞）

形容詞を用いた「A ことは A」のタイプも、措定文的な用法がほとんどである。

(17) まず、柚子から食べると、柚子の味が良く利いた酢飯で、美味しいことは美味しい。

(18) いや、そういうわけではないのよ、という言い訳じみた修飾辞が「普通に」というものです。楽しいことは楽しいのだ、ただ「思いがけない楽しさ」が無いので、顔に出ないだけで。という感じ。

いずれの例も、個別的な「美味しさ」「楽しさ」が、「美味しい」「楽しい」という語が本質的に持つ意味を部分的に所有しているということを示している。これら、A1 が A という語の性質を部分的に所有しているという意味構造が、「部分的には不満もあるが」などの意味を派生させていると考えられる。

2.2. 条件形型

日本語の繰り返し表現には、コピュラ型の他に、「～ば」「～と」のような条件表現を用いたものも見られる。これらを条件形型と呼ぶことにする。

条件形型の繰り返し表現はコピュラ型とはまた異なった用いられ方をする。以下では条件形型の用例を示しつつ、その特徴を述べていきたい。

2.2.1. 「A といえば A」

条件形型の一つのタイプに「A といえば A」というものがある。用例を探すと以下のようなものが見つかる。

(19) パスタメインです。おいしいといえばおいしいのですが、わざわざ行列を作って食べるほどおいしいとは感じませんでした。

(20) 人込みのある所に行くといえば行くのですが自由時間決められていて短時間でパッと楽しめて次に移動。

(21) それにカタログ類も本といえば本だ。

(22) 家で飼っているうさぎが牧草をあまり食べません。食べるといえば食べるのですが、柔らかい部分ばかり食べていて牧草をほとんど食べていないという状態で…

これらは、「A か A でないかといえば A」という意味を表していると考えられる。そのため、「A1 といえば A2」:「おいしいといえばおいしい」「行くといえば行く」「本といえば本」「食べるといえば食べる」という表現はすべて、A1 は A2 の性質を持っているがその水準は高くないという意味を表している。

2.2.2. 「A という A」

また、「A という A」という形も頻度は少ないが用いられるようである。用例を調べてみたところでは、形容詞述語で使用される場合が多い。

(23) オットの出張みやげ。「普通の一六タルトもあったけど和三盆のにしたー」食べてみる。不味くはない。おいしいというおいしい。決して不味くはない。でもあの一六たるとのふんわりや瑞々しさや柚子香が、ないー。

(24) 一喜一憂も楽しいというと楽しいけどねえ…

これは、「A と B」という条件形が、A の時はいつも B のような意味を表すものであるため、一回性の動詞は使用しにくいということと関連していると考えられる。

2.2.3. 「A といったら A」

「A といったら A」という表現には2つの用法がみられる。用法1は強意で用いられるものであり、用法2は「A といえば A」と同様に、A の性質を有しているがそのレベルが低いということを表すものである。

用法1:強意の用法で用いられる 「A と言ったのだから絶対に A」の意味

(25) 「おれは、絶対に浜松に行く」「私は絶対に反対いたします」「お前かいくら反対しても、行くといったら行く!」「行かせません!」二人はにらみ合った。

(26) ああ、うるさい。行くぞ、とりあえず行く。行くといったら行くんだ。

(27) 私がおいしいと言ったらおいしいのです。だまされたと思ってお試し下さい。
(焼きバナナの紹介ページで)

(28) たとえば人との約束を必ず守る人と守らない人がいますが、そういったことも本当に大きな差になってきます。誘うと言ったら誘う。行くと言ったら行く。やると言ったらやる。

用法2:「A といえば A だ」と同様の意味を表すもの

(29) おいしいと言ったらおいしいのですが… 値段に釣り合うか?といわれたらうーん、微妙。正直 100 円のスーパーカップの方がおいしいし量も多い

(30) 魔女の宅急便やトトロも見ていて楽しいといったら楽しいですが、何度も見て考えさせられる?のは千と千尋とかで、なんていうのかな…心の底に来る、得体の知れない何か、のようなものがすきなのもかもしれない

(31) まあ、悩む部分が一杯あるというのは、色々考える事が出来る、という部分で楽しいといったら楽しいんですが。

これを見てみると、述語が動詞の場合は用法1のみのようである。また用法2では「～といったら～なんです/なのだが」のように、後ろに逆説の接続助詞が付く場合がほとんどである。なお、述語が形容詞の場合は用法1と用法2とがあり、名詞述語を用いた例はほとんど見られなかった。

2.2.4. 「A (という) なら A」

形態的には「A (という) なら A」という表現も成立すると考えられるが、実際には、本稿で扱うような繰り返し表現的な用例はなく、通常の場合として用いられているだけのようである。

(32) 全員が行くと言うなら行くと。行かない人がいれば、待たせるのは悪いので行かない。

(33) お子さんが楽しいというなら楽しいのでしょう。

通常の場合「A なら B」の条件表現は、A は伝聞的な事態を表し話者の判断を含まないので、定型化した繰り返し表現としては機能しにくいということなのかもしれない。

2.3. その他のタイプ

これまでコピュラ型、条件型の繰り返し表現を見てきたが、それ以外のタイプを見ておくことにする。それぞれ、コピュラ型、条件型に分類できる可能性もあるが、用法が固定していることから、本稿ではそれらとは異なるものとしておく。

2.3.1. 「A は A で」

「A は A だ」の活用形とも考えられるが、「A は A だ」の用法とは異なる意味を表しているため別に分類した。

(34) 学生は学生で、社会人は社会人で充実してる内容が違う。

(35) 馬鹿は馬鹿で一生懸命生きてるんだから。

いずれも、「A は A なりに」の意味で用いられている。

2.3.2. 「A なら A で」

「～なら」という条件形を用いたものであるが、「A で構わないから」という意味に固定されて用いられる場合が多い。

(36) 親は、もうやめるならやめるではっきりしてくれ。と言っています。私は、確かにこの学校には居たいとは思いません。

(37) もう、おいしくないならおいしくないで、さっきのサンマアイスとかみたいに話題性のみで具を入れてみてはどうか。「お好み焼き」を入れてみる。「生牡蠣」を入れてみる。

ただし、「A の場合」という意味の用例も見られる。

(38) ジョブズの提案に対して当時の CEO ギル・アメリオは「とんでもない、やめるならやめるで費用が掛かる」と反論、アメリオの意見は正論といえるものでした。

3. まとめ

ここまで、日本語のトートロジーと言われてきた表現について、繰り返し表現としてとらえ直し、その用例と意味を概観してきた。その中で既に考察を行った部分も含め、重要であると思われる点について以下にまとめることにする。

3.1. 繰り返し表現の解釈と意味の派生

本稿では、日本語の繰り返し表現を、その形態的特徴からコピュラ型と条件型に分類した。そのうち、コピュラ型は意味的な特徴から措定文型と倒置同一性文型に分けられることを述べた。

措定文型の場合、「A1 は A2 だ」の意味は個別的な「A1」は一般的に「A2」が持つとされる性質の一部を有している、という意味を表す。つまり、命題レベルで意味を表示しているということになる。

倒置同一性文型は、文字通り「A は A だ」と述べているのみで、措定文型のような命題レベルでの意味は表さない。そのため、その解釈は、何も述べていないという意味での「説明放棄」と、概念的な意味は表示していないということからの「内包的意味の強調」という2つの方向性で進められることを仮定した。

また、条件形型の多くは措定文型の用法で用いられ、「A ことは A ことだ」という形式

のみが倒置同一性文型の解釈をされることを示した。

3.2 「A ことは A」と「A といえば A」の用法差

それぞれがコピュラ型と条件型に分類されているが、その用法は非常に類似している。ただし、いくつかの差異がみられる。例えば、頻度を表す表現は、「A ことは A」で用いられやすいということである。

(39) 蕎麦屋にも行くことは行くけど、何となく敷居の高さを感じて、自然に足が遠くなっていたような気がします。

(40) タコは江戸っ子も食べたことは食べたのですが、安価なものではありませんでした。

? (41) 蕎麦屋に行くといえば行くけど、何となく・・・

? (42) タコは江戸っ子も食べたといえば食べたのですが・・・

(39) と (41)、(40) と (42) を比較してみると、(39) (40) のような「A ことは A」を用いる方がより自然な表現となるように思われる。

(43) 人込みのある所に行くといえば行くのですが自由時間決められていて短時間でパッと楽しめて次に移動。

(44) 晩飯食べたといえば食べたのですが 半分 残したよ・・・

(43) (44) のような文が「V といえば V」の動詞を用いた用例であるが、これらの文は頻度を表しているわけではない。これはなぜなのだろうか。

(39) を例にすると、措定文の用法で意味を派生させている「A は A」のタイプは、「行くことは行く」という形で、以下のような意味を表していると考えられる。

行くこと 1: 行くが時間が短い、ゆっくり過ごせない「行く」

行くこと 2: 一般的に「行く」という行為から連想する、時間を取ってゆっくり過ごすという意味での「行く」

つまり、「行くこと 1」は「行くこと 2」の意味の一部を有しているが、「行くこと 2」と等価ではない、と主張しており、等価ではないものとしては、程度、頻度、量、など様々なものが想定されることとなる。

一方、「A といえば A」は「A かどうかと聞かれれば A」という意味を表す場合が多い。「美味しいかどうかと聞かれれば美味しいと思う」のように、A と \bar{A} のどちらに属するかの二者択一をした場合に、A に属するという意味で用いられていると考えられる。

なお、繰り返し表現の用法差で興味深い現象の一つに、以下のようなものがある。

* (45) おいしいことはおいしいけど、おいしくないことはおいしくない。

(46) おいしい言え**ば**おいしいけど、おいしくない言え**ば**おいしくない。

(45) の文は不適切な文となるが、(46) は適切な文となるのだが、これも、「A ことは A」「A といえば A」の意味の違いによって説明が可能のように思われる。

(46) は「おいしいともおいしくないとも言える」という意味であり、「味」は「おいしい」「おいしくない」の両者の中間的なところに位置し、「どちらとも言える」という意味で用いられる。(45) は、「おいしいことはおいしい」で既に「おいしい」という属性を有していると判断していることになるので、その後「おいしくない」という属性を有して

いと述べることは論理的に矛盾し不適切な文となると考えることができないだろうか。

3.3. 繰り返し表現と配慮

コピュラ文型の場合、「聞き手にある物事が持つ属性を喚起させて、対象物もその属性を有することを理解させる。」働きをする。このことから、聞き手と認識の相違がある場合に、その相違を直接的に伝えるのではなく、より小さく間接的に伝える働きを持つ。

条件形型の場合も、「A と A のどちらかと聞かれれば A に属する」という判断を述べることで、聞き手と認識の相違がある場合、その相違をより小さくし間接的に伝える働きを持つと考えられる。

(47) どう？おいしい？

おいしくありません。ちょっと味が薄い気がします。

おいしいことはおいしいですが、ちょっと味が薄い気がします。

おいしいと言えはおいしいですが、ちょっと味が薄い気がします。

このような相違を間接的に伝える、相違をより小さくするという働きによって、繰り返し表現が配慮表現として用いられるのだと考えられる。

4. 注

(1) 陳・張 (2014) はトートロジーを措定文、倒置同定文、定義文に分類して考察しているが、本稿ではこの立場は採らない。細分化することによる利点がないこと、倒置同定文、定義文と考えることの必然性が強くないことによる。なお、本稿では「トートロジーはトートロジーだ」を倒置同一性文としたが、これを倒置同定文と考へても考察の結果は本稿と同様となる。

(2) 本来は形式的にはコピュラ文として成立していないため措定文ではないが、意味的に措定文型の繰り返し表現と類似しているという点から措定文的と述べている。

5. 参考文献

- 今田水穂 (2008) 「日本語名詞述語文の記述的分類の再分析:機能論的観点から」筑波応用言語学研究 15、pp. 15-29
- 小野正樹・山岡政紀・牧原功・李奇楠 (2016) 「配慮表現から見た日本語の同一語句の繰り返し発話について」日本語教育世界大会 2016 ポスター発表
- 酒井智宏 (2010) 『トートロジーの意味を構築する:「意味」のない日常言語の意味論』くろしお出版
- 瀬戸賢一 (2003) 「トートロジー (tautology)」『応用言語学事典』研究社、307
- 西山佑司 (1990) 「コピュラ文における名詞句の解釈をめぐって」『文法と意味の間:国広哲弥教授還暦退官記念論文集』くろしお出版、pp. 133-148
- (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論』ひつじ書房
- 陳訪澤・張秀娟 (2014) 「トートロジー文とコピュラ文との関わりについて—その意味構造に注目して—」『日本学刊』17、香港日本語教育研究会、pp. 12-29

(牧原功・群馬大学・makihara@gunma-u.ac.jp)